1. 沖縄トリップ

ー琉球王朝から現代まで、沖縄のルーツを探る１日。

2 日目は「琉球王朝」から「昔懐かしい沖縄」を経て「現代の沖縄」までを 1 日で旅する。沖縄のアイデンティティ、すなわち沖縄らしさはどこから来るのだろうか？それをぜひ肌で感じてもらいたい。

★ 首里城〔世界遺産〕

首里城は、標高 120m の石灰岩丘陵に築かれた沖縄最大の城（グスク）である。城の規模は東西 350m、南北 200m に及ぶ巨大な城であるが、実はここにいつ、誰が最初に城を築いたのかは諸説があり、正確にはまだわかっていない。

グスクは沖縄本島とその周辺の離島だけでも、200 以上あったようである。グスクは 12 世紀くらいから造られ始め、首里城も最初は数あるグスクの 1 つでしかなかったと思われる。

14 世紀くらいになると、数多いグスクは権力争いによって次第に淘汰されていったようだ。

首里城は、1429 年に尚巴志（しょうはし）王が琉球を統一したときから、1879 年（明治 12 年）に廃藩置県によって居城を追われるまで、450 年に渡り琉球王国の王城であった。

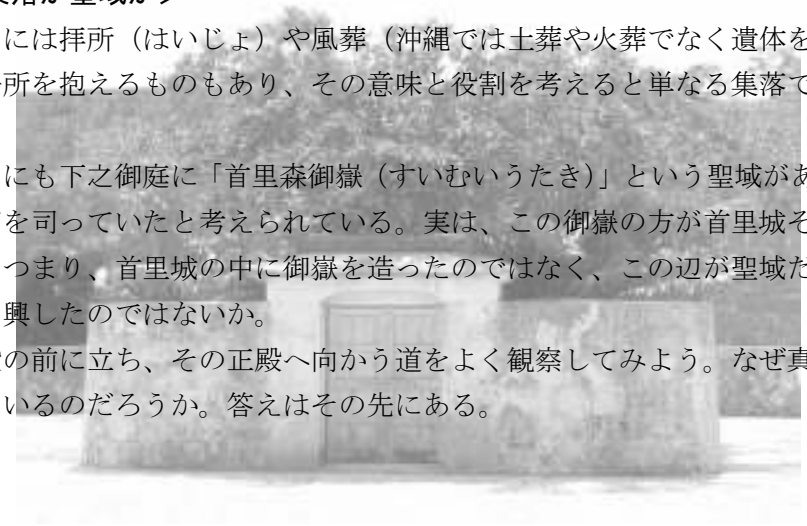
現在の首里城は、1945 年の沖縄戦によって完全に消失してしまった後、古写真などを手がかりに復元されたものである。日本軍がこの地下に本部を置いたことにより、アメリカ軍から空爆を受け、その大半が破壊された。修復された城壁をよく見ると、破壊されずに残った部分と復元された部分との境目があることに気づくにちがいない。

＜グスクは集落か聖域か＞

グスクの中には拝所（はいじょ）や風葬（沖縄では土葬や火葬でなく遺体を野に晒した）に使われた場所を抱えるものもあり、その意味と役割を考えると単なる集落ではないようである。

首里城の中にも下之御庭に「首里森御嶽（すいむいうたき）」という聖域があり、神と人とをつなぐ信仰を司っていたと考えられている。実は、この御嶽の方が首里城そのものよりも歴史が古い。つまり、首里城の中に御嶽を造ったのではなく、この辺が聖域だからこそ城壁で囲い、城を興したのではないか。

首里城正殿の前に立ち、その正殿へ向かう道をよく観察してみよう。なぜ真っ直ぐでなく斜めに延びているのだろうか。答えはその先にある。



＜聖なる道＞

その道は首里森御嶽へと続いている。というよりも、首里森御嶽から首里城正殿へと道が延びている、と言った方が正しい。地図を見ると、正殿を突き抜けたそのずっと先に、さらに聖域がいくつも並んでいることが分かるだろう。このラインは「斎場御嶽（せいふぁうたき）」を抜け、遥か海上に浮かぶ「久高島」へと続くのだ。

久高島は琉球王朝以前の古い沖縄を知る島であり、神が降り立ったとされる島である。

女神が拓いた神話の島。この島では女神に仕える「ノロ」と呼ばれる巫女たちが、今なお独特の宗教文化を形作っている。

斎場御嶽は、2000 年に首里城とともに世界遺産として登録された第一級の聖地である。琉球王朝時代には国王も参拝に訪れたほどの拝所で、沖に久高島を望む岬の先端に位置している。

これは何を意味するのだろうか。琉球の人々が祖先とのつながりを大切にしていたことは疑うまでもないが、生活に根ざした信仰の深さがひしひしと伝わってくる。

正殿の前に来たらこの道を歩いてみよう。その道は聖なる道である。

＜ジュゴンの海＞

こんな話がある。斎場御嶽の入口である御門口（うじょうぐち）から久高島に向かう道には琉球石灰岩を小さく砕いた石が敷き詰められている。海の彼方に久高島を参拝するための参道である。近年の調査研究によって、この敷石の下に白い砂の層が有ることがわかった。それは久高島東海岸の伊敷浜から運ばれたものであるという。

実はこれは砂ではなく、ジュゴン（ザン）の風化した骨を砕いたものなのである。

石垣島の先に浮かぶ新城島（あらぐすくじま）では、水がなく農作物が育たなかったことから、琉球王朝時代に人頭税としてジュゴンの干し肉を年貢として納めていたという。

ジュゴンは人魚伝説もあり、また当時その肉は不老不死の妙薬として崇められていたからである。この島にある「アール御嶽」には今でもジュゴンの頭蓋骨が納められているが、限られた島民しか立ち入りが許されない聖域とされている。ジュゴンは神聖な生き物だった。

沖縄本島はジュゴンの生息北限に当たるが、現在生息数が激減している。明治大正期に行われた乱獲と環境悪化によって海を追われたためだ。美ら海水族館では近縁種のマナティーの飼育に力を入れているので、興味のある人は最終日に立ち寄ってみるとよい。

２. 古きよき沖縄

ー沖縄の原風景とは？そのアイデンティティを探る。

赤瓦と漆喰の白が美しいコントラストを描くのが沖縄の伝統的家屋の特徴である。屋根にはシーサーが入り口を見守るように座り、まわりには琉球石灰岩（サンゴの骨）の石垣とフク木並木が涼しげな木陰をつくっている。

備瀬のフク木並木

夏の暑さをしのぐ赤瓦の屋根に、開け放たれた間取り。台風の猛威に耐えるために瓦は漆喰で固められ、軒を低くし、抵抗を減らしている。石灰岩の石垣も屋敷のまわりに植えられたフク木の防風林も、台風に備えた生活の工夫である。沖縄では道すらも真っ直ぐではなく、Ｔ字路や曲線を多用して突風が吹き抜けるのを防いでいる。

道に白い砂を敷き詰めるのは、夜でも月や星明りで道が見えやすくするためだとか。懐かしい町並みを歩くと、先人たちの工夫がそこかしこに見て取れる。

ところで、曲がりくねった路地裏を散策していると、シーサーの他にもよく目に付くものがある。「石敢當」と書かれた石板である。「いしがんどう」とか「しがんとう」などと読む。中国に起源を持つ魔除けの一種で、シーサーが家の入口を守るのに対して、Ｔ字路や三叉路の突き当たりに置かれる。

沖縄の路地には魔物（まじむん）が徘徊していると信じられていて、この魔物が突き当たりの家に飛び込んでしまうのを防ぐのだ。魔物は石敢當に当たると砕け散るとされる。

写真は沖縄の伝統的家屋である。これは竹富島のもので、残念ながら本島ではほとんど見かけなくなってしまったが、かつてはこのような風景が一面に広がっていたのだという。

その土地の自然にフィットした風景はまさに財産である。

★ おきなわワールド

本島南部は琉球石灰岩からなる低島であり、地下には数多くの鍾乳洞が眠る。おきなわワールドは本島でも最大級の鍾乳洞「玉泉洞」の上に位置し、全長 5km のうち 890m を見学することができる。

他にも「琉球城下町（工房群）」「ハブ博物公園」「熱帯フルーツ園」などがあり、1 日 4 回スーパーエイサーの群舞も行われている。エイサーはホテルでも鑑賞するが、ここのエイサーは太鼓の他に、民謡，カチャーシーなどを組み合わせた独自のものなので、時間が合えば見学してみるとよい。（11：00　/ 12：30　/ 15：00　/ 16：00 公演）

★ むら咲きむら

赤瓦と漆喰の白、琉球石灰岩の石垣。この村には沖縄の原風景が再現されている。NHK 大河ドラマ「琉球の風」のセット跡をそのまま利用して、懐かしい町並みをつくり出した。さらに、それぞれの屋敷や古民家を体験工房として再生。シーサー作りや紅型，トンボ玉、貝やサンゴを使った工芸品作りが楽しめる。

村から一歩足を延ばせば自然のビーチと草原の広がる展望台があり、海の青さが目に染みる。ここでは海もまた見所の１つである。

３. 新しい沖縄

－戦後、奇跡的な復興を果たした「奇跡の１マイル」を歩く。

★ 国際通り

国際通りは、かつて従軍記者アーニーパイルが「奇跡の１マイル」と評したことで知られる那覇のメインストリートである。(→伊江島にて戦死、アーニーパイル碑)

もともとはただの田舎道に過ぎなかったこの通りは、戦後、人々が集まりバラックや闇市が立ち並ぶようになってから奇跡的な復興を果たした。1944 年、10.10 空襲で那覇市の 90%の家屋が壊滅してからおよそ 60 年。現在では沖縄で最もにぎわいのある通りの 1 つとなっている。

ところで、街歩きを本当に楽しむのなら、メインストリートだけでなく路地裏にもぜひ足を運んでもらいたい。有名なところでは「市場本通り」がある。ここには「牧志公設市場」があり、地元の人々の活気と土地の食材が溢れている。表通りとはまた違った趣を味わえることだろう。

国際通りでは、青空を取り戻すため現在電柱を撤去中なのだという。「歩いて楽しい国際通り」を目指して今なお変貌中の「奇跡の１マイル」を体験しよう。